琉球大学学術リポジトリ

奄美における葬送儀礼の外部化　－大和村津名久の事例を中心に－

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2009-06-02
	キーワード (Ja): 土葬, 火葬, 葬送儀礼, 葬送儀礼の外部化, 宗教者, 葬祭業者, 人口流失, 過疎・高齢化
	キーワード (En):
	作成者: 津波, 高志, Tsuha, Takashi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/10387

奄美における葬送儀礼の外部化
—大和村津名久の事例を中心に—

津　波　高　志
Takashi Tsuha

Changes of funeral rite in the Amami Islands

本論文では、奄美・沖縄において火葬の導入に伴って葬祭業者が関与し、葬送儀礼の外部化が起きたとする説を奄美で検証するために1村落の事例を記述した。また、近代初頭あたりまで遡って見れば、奄美における葬送儀礼の外部化は2度あったことを明らかにした。その2度の外部化を1村落の事例に読み取りつつ、琉球弧の文化の研究において、こと奄美に関しては薩摩・鹿児島の影響を十分に考慮する必要があり、葬送儀礼の外部化もその例外ではないことを指摘した。

キーワード：土葬、火葬、葬送儀礼、葬送儀礼の外部化、宗教者、葬祭業者
人口流失、過疎・高齢化

1　はじめに

奄美・沖縄の葬制や墓制に関する民俗学的ないし文化人類学的な研究において、比較的最近の傾向として火葬の導入と普及に伴う変化の側面を扱った報告や論文が出つつある(1)。社会の変化に伴って葬墓制も変化するものであり、その様相を追求し考究することは、研究の流れからすれば至極当然のことと思われる。

その流れのなかで、私が特に注目するものの１つが、加藤正春の「葬送儀礼の外部化」という指摘である。加藤は、奄美・沖縄において火葬だけが単独で導入され、普及していくのではなく、それと前後して葬祭業者の参入が見いだされるなど、さまざまな要素の受け入れと変化を伴っているとしたうえで、次のように述べている。「一般的にいって、火葬の導入は葬送儀礼の外部化を導くようである。地域社会の自主的な規範にしたがって地域社会の人々の手で行われていた儀礼行為が、外部の別の規範を持った専門家の手にゆだねられるようになることを儀礼の外部化と呼ぶならば、火葬の導入は、葬送儀礼の少なくとも一部の外部化をうながす」［加藤　2001：89頁］。さらに、奄美大島に関しては「道路などの社会基盤整備と火葬の普及が関連しているようである。それは同時に、生活面での他の変化とも平行している。さらに、1980年代になると過疎の影響が見られるようである」とも述べている［加藤　2001：116頁］。

火葬の導入と葬送儀礼の外部化に関する加藤の指摘は、若干の地域を除いて、ほとんど火葬へ移行した奄美・沖縄における葬送儀礼を理解するために是非とも念頭に置いておくべきであろう。そのうえで、さらに一歩踏み込んで、奄美諸島においては、火葬の導入以前に土葬が導入されたことを想起しつつ、土葬の導入にともなう葬送儀礼の外部化についても検討されるべきであろう。

加藤は奄美・沖縄における火葬の導入と普及の過程について、およびそれにかかわるさまざまな変化について鳥瞰的に扱っている。本稿ではそれとは反対に、事例としては奄美大島大和村における１例のみを記述する。その後で、奄美においては火葬が導入されるおおよそ100年前に風葬から土葬への葬法の転換があり、それに伴って葬送儀礼の外部化も起きたことを明らかにする。それら両者を踏まえた上で、奄美の１事例で加藤の指摘を検証し、さらに２度の葬送儀礼の外部化に位置づけて捉えることが本稿の目的である。

事例として取り上げる村落は、奄美大島大和村津名久である。調査地に関

しては、火葬が導入される社会的背景について説明する際に詳しく述べるので、ここでは地理的な位置と人口などについて簡単に紹介しておきたい。

大和村は奄美大島のほぼ中央部に位置し（図１参照）、東を奄美市名瀬（旧名瀬市）、南と西を奄美市住用（旧住用村）と宇検村に接し、北は東シナ海に面している（図２参照）。行政区は、国直、湯湾釜、津名久、思勝、大和浜、大棚、大金久、戸円、名音、志戸勘、今里の11区からなっている（図２参照[2]）。各区には、区民によって選ばれた区長がおり、また公民館、生活館、コミュニティーセンターなどと称され、区民の集会や諸行事に利用される施設もある。

大和村の11の行政区はいずれも近世には村として存立していた。現在、地元では個々の行政区を集落と呼ぶのが普通になっているが、方言ではシマと称している。津名久はそれらの行政区の１つで、大和村の東側に位置する。2006年現在の人口は154人（男性73人、女性81人）である。世帯数は68世帯、平均世帯員数は2.26人である。

津名久では昭和40年代後半に火葬が普及し始めた。それから10年間ほど、すなわち昭和50年代前半頃までは土葬も平行して行われていた。火葬が一般

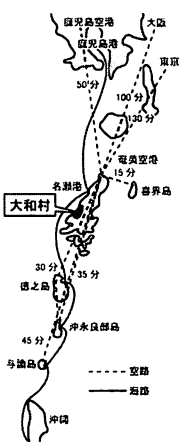


図１　大和村の位置

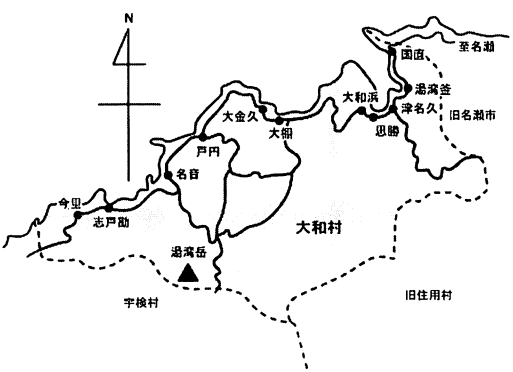


図２　津名久の位置

化した今日でも、村落の共同墓地には土葬されたまま、洗骨改葬を待つ墓が２つある。そのうちの１つは、平成12年の死者が葬られている。そのような葬制の状況は、土葬から火葬への移行に伴う儀礼の変容をより容易に把握させてくれるであろう。

2　土葬における葬送儀礼

葬祭業者が参与する火葬導入後の葬送儀礼とそれ以前の土葬における葬送儀礼との大きな違いは、社会関係から見れば、シマと称される村落を単位とする互助的な関係のネットワークがいかに機能するかという点にある。葬祭業者を介さずに行われる土葬における葬儀は、シマの人々の協力が前提となっているのである。

以下に、通夜から改葬まで、津名久の土葬における葬送儀礼を記述する。いささか冗長に過ぎるかもしれないが、シマの人々にいかなる役割がいかに割り振られるか、そしていかに多くの人手を要するかといった点を示すためには、それもまたやむを得ないであろう。

（1）通夜

死人がでると、すぐに家の時計を止め、仏壇の戸を閉める。お湯を沸かして死者の体をきれいに拭き、生前に着ていた着物の中で最も良いものを着せる。足を曲げた状態でクヮンバク（棺箱）に入れるので、「命が切れたと思ったら、早く足を曲げれ」といわれている。死人の足を曲げ、首から掛けた紐で足を固定し、手は胸の上で組ませる。仏壇の前に北枕で安置し、上から着物をケーシマ（裏表逆）にして被せる。顔は白い布で覆う。身内以外は顔を見るなといわれている。

家が広い場合は家で通夜を行うが、狭い場合は使用料を払って公民館を借りる。それは葬式でも同じである。必要な食器類もそろっており、それらも使用料を払って借りることができる。公民館を利用する際には、遺体は家の

仏壇の前に安置し、家に入りきらない人が公民館で食事などをすることになる。亡くなった晩のみ通夜を行う。１本の線香を立て、一晩中火を絶やさないように交替で見守る。

通夜にはシンセキが集まりショクアテ（職当て）をする。ショクアテは主に葬式の際の仕事の割り振りである。シマの人なら誰に割り振っても良いとされる。大まかに大工の部、山の部、炊事の部などに分けられ、その中でさらに細かく割り振られる。ショクアテで決められる作業の分担は、イキフリ（池掘り）、クゥンバク（棺箱）・ヤギョ（家形）・わらじ・マカヤドマ（真茅苫）・旗・マエジュク・タイ（松明）・灯籠などの作製、ヘゴキリ（へご切り）、炊事などである。

ショクアテで決められた各担当者の氏名は帳面に書き込む。それに従って、連絡係りがそれぞれの家にお願いをして回る。炊事に必要な薪の切り出しは夜のうちに行われる。シンセキ以外のシマの人は通夜にはあまり顔を出さない。

（２）準備作業

ソウシキは亡くなった翌日に行われる。薪の切り出しなどを除けば、割り振られた作業は、ソウシキ当日の早朝から行われる。一番大きな仕事はイキフリ（池堀り）で、墓の敷地内にクゥンバクを埋めるため、イキと称される約２㍍の深い穴を４名ほどで掘る。

クゥンバクは大工に頼んで、シマの公民館の庭で作ってもらう。綺麗な杉板を用いる。大きさは死者の体に合わせる。生前の元気なうちに杉を製材し、天井裏に置いておく人もいる。クゥンバクはヌリフニ（乗り船）あるいは単にクゥン（棺）とも呼ばれている。出棺の際、クゥンバクを運ぶための担架の役割をするものも椎の木を２本切り込んで作られる。

ヘゴキリは山仕事をしている人、２人に頼む。イキにクゥンバクを入れ、その周りを腐らないヘゴの木で囲んでから土を被せるためである。ヘゴは軽く切りやすい木であるが、山奥の谷間に生えているため、早朝に出かける。

ヘゴは足場の悪い所に生えているため、まず肩ほどの高さに切り出し、厚さ５㎝ほどの板に製材して、午後３時くらいまでに担いで戻る。

ヤギョは神社を形取ったものである（写真１・写真２参照）。鉋できれいに削ったりしなければならないので、大工でないと作ることができない。わらじは「あの世で旅をするのに必要」とされ、稲藁で作られる。

マカヤドマは埋葬のときに使用される座布団の代わりになる物である。ススキのような植物を数本根から引き抜き、根元をそろえてマカヤで２枚編む。男性の仕事である。旗は竹を十字に組み、買ってきた赤と白の長い布を下げる。赤と白、２本ずつ計４本作られ、布には死者の名前が書き込まれる。マエジュクは小さな机状のもので、ろうそくや線香、水、花などを入れるための竹を下から釘で打ちつける（写真３参照）。

タイは松明のことで、枯れた竹を７、８本束にしたものである。灯籠は四角い箱形で、支柱の先を土に刺せるように尖らせる。三日月と満月の形が掘られており、月の落ちる方向に三日月を向け、反対側に満月がくるように立てる。

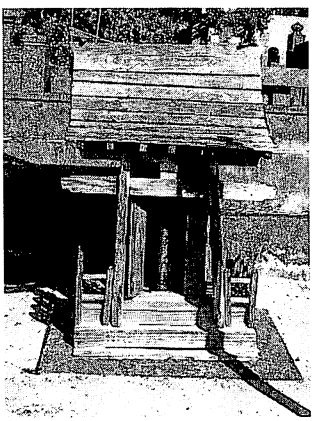


写真１　ヤギョ（正面）

写真２　ヤギョ（斜め後ろ）と杖

炊事は女性の仕事で、庭に大きな釜や鍋を出して行う。料理の種類によっ

てそれぞれ担当者が決まっている。他にもトラックを借りて買出しに行く係り、掃除をする係りなどがいる。

死者が出たことは一晩でシマ中に広まるため、ショクアテで頼まれなかった人も手伝いに来る。シマの女性は喪服を着て手伝いをする（70歳手前までは、女性は葬式だけでなく、行事ごとの炊事の手伝いもする）。準備やソウシキは死者が出たシマの人で行う。他のシマの人はシンセキや親しくしていた者でないと参加しないが、隣接する大和浜や思勝の女性に炊事手伝いの声をかけることもある。祝い事には招いた人しか来ないが、悔やみには何人来るか分からないし、手伝いの人にも出すので、食事を大量に作らなければならないからである。

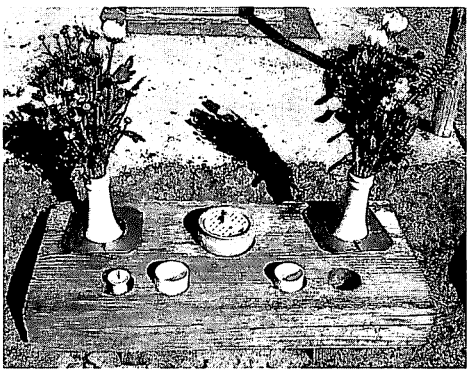


写真３　マエジュク（竹でなく陶器類を使用）

午前10時頃にオチャ（お茶）といって、ご飯と野菜を炊いたものを出し、午後12時には昼食をそれぞれの作業の場所に運ぶ。午後３時頃、集まってソウシキに持って行く物の確認をする。夕方に入棺されるが、その前にオゼン（お膳）が出される。オゼンにはご飯、吸い物２つ、刺身、天ぷら、野菜を炊いたもの、焼酎が乗せられている。吸い物にはオモチ（粉を買ってきて団子のようなものを作る）と豆腐がそれぞれ入れられる。豆腐は１丁で４人分である。真ん中で切り、さらに三角形になるように斜めに切る。その上に５㌢ほどに切った葱をのせる。祝い事では吸い物は１つ出されるが、結婚式と葬式では２度とするなという意味を込めて２つ出される。野菜は大根や里芋、南瓜などを炊き、上に豚肉をのせる。

豚や刺身が使われていても、ショウジンリョウリ（精進料理）と呼ばれて

いる。昭和40年代頃までは葬式の料理はご馳走であり、子どもたちは葬式の料理を楽しみにしていた。現在でも葬式の料理のことをゴチソウといっている。昭和20年代の食糧不足の頃は、年寄りのいる家では、米など、食べるのを我慢して葬式に備えていた。

（３）野辺送り

入棺は日が沈む前に、子や甥など近親の男性４人ほどで行う。ただし、入棺する日の十二支と生まれ年の十二支が同じ場合は、死者に触れることも顔を見ることもできない。入棺する日の十二支が長男の生まれ年と同じだったため、代わりに死者の妻が行ったという例もある。

足を曲げ、クヮンバクに寝かして入れ、上等な着物を裏表逆にして掛ける。おにぎりを胸の上に置き、冥土で飲むとされるオチャ（海岸沿いの崖に生えている草）や根無葛を袋に詰めたもの、ムジ（田芋の茎）を斜めに切ったもの、および草鞋などを入れる。時計などの金物は入れてはいけない。「三途の川はオサイセンを持って行かないと渡れない」とされ、オサイセンも白い袋に入れ、首から掛けて胸の上に置く。

「もう亡くなったのだから、後のことは心配しないで成仏するように。入れるものは入れたし、これで思い残すことはないから、夢を見せるなよ」という趣旨のことをクヮンバクの蓋を閉める前に「吹き込む」。閉めると、途中まで穴を開けて竹釘を差し込み、平たい石で打つ。入棺にかかわった者全員が打ち、最後に喪主が打つ。

炊事場で１つのタイ（松明）に火を付け、近親の男性３人が交替でコソデ（逆手）で持って後ろ向きに歩き、オモテヤドまたはオモテグチと称される庭に面した縁側から外に投げつける。コソデで行う理由はわからないという。ちなみに、恵原によれば、「平素は何事でも、物事を逆さにすることをコソといって忌むが、葬式では万事を逆にする」［恵原　1974：60頁］。投げつけられたタイは庭で待機していた人が拾い、残り３本のタイも火をつけておく。

クヮンバクを椎の木で作った担架のようなものに乗せ、庭に面した縁側、

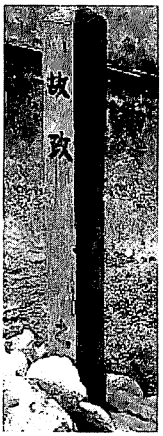


写真４
ツカ（正面）

写真５
ツカ（横と裏）

オモテヤドから出す。家の構造上、オモテヤドから出せない場合は、玄関以外の窓から出す。死者に１番近い身内の青年２人が前後で肩に乗せて持ち、椎の木に結んだ縄を首から掛ける。テガエー（手伝い）と呼ばれる補助役の青年が四隅につくが、実際に担ぐのはクヮンバクの前後の２人で、ソウシキの会場である共同墓地まで歩いて行く。

日が暮れて暗く、イキを掘った人でなければ場所がわからないので、タイはイキフリの者が担当する。葬列の先頭にはイチバンタイ（１番松明）とイチバンバタ（１番旗）が立ち、２番、３番、４番とタイと旗が交互に並ぶ。その後に、マエジュク、クヮンバク、ツカ（角材に死者の名前、年齢、死亡日を書いたもの。写真４・写真５参照)、写真などが続く。葬列が門口を出たら、死者が生前使っていた茶碗を門口で割り、家の中をコソデで掃く。２度と家に入らせないようにするという意味である。門口に箒を逆さまに置き、悪霊が入らないようにする。

（４）ソウシキ

ソウシキの会場はシマの共同墓地の入口である。そこに着いたら、クヮンバクを担いだまま反時計回りに３回まわってから正面中央の焼香台の上に据える（写真６・写真７参照)。その上に写真を置く。３回まわすことで道をわからなくさせ、戻って来られないようにするといわれている。

会場には参列者が待機しており、受付け用の机などが準備されている。遺族の挨拶はない。まず、ボンサンが拝み、シンセキ以外の参列者が順番に手を合わせる。ボンサンと呼んではいるが、僧侶であったり、神主であったりする。参列者は焼香を終えしだい、順に係の者から焼酎を受け取り、それで

清めて帰る。

焼香台での焼香に関しては注意すべき点がある。一般の参列者が「ソウシキに行く」という場合、そこでの焼香に参加することを意味する。また、最近の「告別式」もその焼香を意味するのである。「ここで一般部落民の告別を受ける」［改訂名瀬市誌編纂委員会　1996：52頁］とか、「シマミシと称し、シマ（郷土）に最後の別れを告げさせるためだ」［恵原　1979：201頁］とかの説明も同様である。

写真６　津名久の共同墓地と焼香台

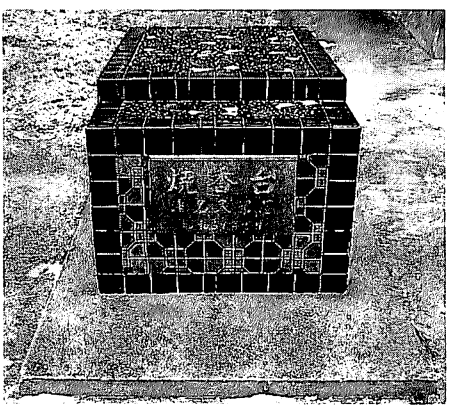


写真７　焼香台

（5）埋葬

参列者が帰ると、ショクアテで埋め役になった青年とシンセキが残る。シンセキはたいてい20名から30名ほどである。クヮンバクを埋めるとき、特に決まった方位はない。掘られたイキの向きに合わせて埋める。イキの中にマカヤドマを１枚敷き、担ぐときに使用した縄でクヮンバクを縛って取っ手を４つ付け、４名でゆっくり下ろし、縄をはずす。クヮンバクの周囲と上をヘゴで隙間なく囲む。杉でできているクヮンバクの板は腐ってなくなるが、ヘゴは腐らないため、数年後にカイソ（改葬）をするとき、「綺麗に拝むことができる」。掘り起こしたときに中は空洞で砂も入っていない。しかし、きちんと囲まずに、いい加減なやり方をすると、遺骨を砂の中から出さなければならなくなる。

青年４、５名で地面より少し土を盛り上げ、足で踏み固めてから棒で叩く。その棒は担架に使った木で作ったものである。「グショガタビイモレヨ」（後生の旅に行かれて下さい）と言いながら叩いて固める。自殺者の場合は、反対に死者をののしり、恨み言をいいながら叩く。

頭の方にツカを立て、それに被せるようにヤギョを立てる。灯籠が１ヶ所に立てられる。クヮンバクを埋めた四隅には旗が１本ずつ計４本立てられる。足の方にマエジュクが置かれる（写真８参照）。「家には仏壇があり、葬式にはボンサン（この場合は僧侶）が来るが、土葬したときには神式の社を建てる」という。ヤギョは埋めたところの目印になるが、薄い板で作られているため、数年経つと腐ってしまう。そうなると、釘などが出て危ないので取り除き、代わりにナバイシ（茸石＝テーブルサンゴ）が置かれる（写真９参照）。

（6）シンセキの拝み

クヮンバクを埋め終わると、マエジュクの前にマカヤドマを敷き、そこから頭の方に向かって拝む。その拝みはシンセキをソウシキの組、ミキャナンカ（三日七日）の組、シジュウクンチ（四九日）の組に分けて行われる。昭和40年代前半頃までは、ミキャナンカはソウシキの翌日にシンセキを招いて

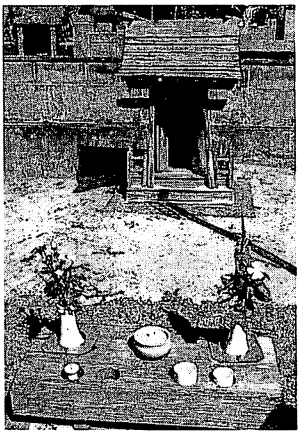


写真８　ヤギョとマエジュク

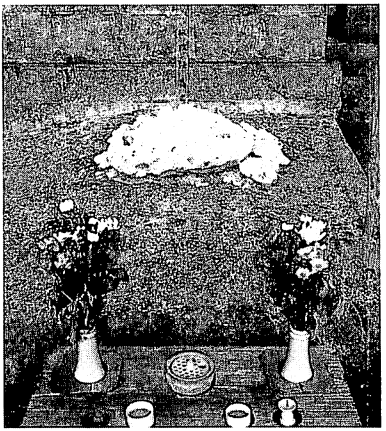


写真９　ナバイシ（写真８の撮影１年後）

死者の弔いをする行事であった。シジュウクンチもまた別に日取りをして行われた。しかし、本土のような遠方から来るシンセキが仕事の都合ですぐに帰らなければならないという理由で、昭和40年代後半頃、すなわち火葬が導入され始めた頃から、土葬であってもソウシキの日に一緒に行われるようになった。

同じ人がソウシキとミキャナンカのように２度拝むことはできないとされているので、まず、埋葬のために残った人数の５分の４くらいがソウシキの組として拝み、その後、別の場所で待機していたミキャナンカの組が拝む。人数は偶数とされ、「ミキャナンカまで重ねて拝みますよ」と言葉を掛けて拝む。シジュウクンチの組も同じように行う。マエジュクに供えられている花やお酒などはその都度かえる。

シンセキが喪家に戻ると、シジュウクンチの料理が出される。それは野辺送りに行く前に出されたものと同じである。２時間ほど、酒を飲みながら故人について話をする。

ソウシキの翌日には止めていた時計を元に戻す。死者はソウシキの日に三

途の川を渡るといわれているが、ソウシキから１週間は子供らが夕方ろうそくを灯し、線香を２本立てる。その１週間が過ぎれば、旧暦の１日と15日の墓参りのみとなる。

（７）ショウシジュウクンチ

死んだ日から49日経つと、人間の根の髭（まつ毛や髪の毛）が落ち、「本当の仏さんになる」といわれている。葬式の日にシジュウクンチの行事まで終えているため、それと区別して、ショウシジュウクンチ（ほんとの四九日）と称して、子や孫など、喪家に招かれた近親の者だけで墓参りに行く。ただ、正確に死んだ日から49日目ではなく、日を選んで行われる。シマでは十二支が卯の日はその日１日限りといわれ、葬式や法事には良いとされている。そのため、卯の日が選ばれたり、働いている人の都合に合わせて週末に行われたりしている。

その日に旗や灯籠を浜で焼く。また、仮位牌から本位牌へと移される。招かれた人は改めて香典を出すため、喪家は金額の半分ほどのお返しを用意する。三角袋（持ち手の付いた白いビニール袋）、もしくは青に白の水玉模様のビニール風呂敷に紙箱に詰めたムスコ（落雁）や饅頭などの菓子、折箱（プラスチック、発泡スチロールの蓋付弁当箱）に入れた鶏の片もものから揚げなどのおかずなどを入れ、名前を書いておいて、帰るときに渡す。

49日目にシジュウクンチを行っていた頃は、その日にシンセキが羽織袴（男の人は紋付）を着けて墓参りをし、ソウシキに世話になった全ての家を10人くらいで挨拶して回った。その後、喪家で「ご馳走を食べ、お酒を飲みながら騒いだ」。「頑張って難儀したけど四九日で綺麗な奉公ができた。これで喜んで天国に行ったはず」と、シンセキが喪家にお礼をいう。死者の魂は、天国と地上の間をうろうろしており、シジュウクンチにそのお礼をいうことで本当の仏さんになる、といわれている。そのことを、「お墓のカミサマ（神様）になる」ともいう。

四九日で「家の喪が明ける」とされ、旅行などにも行くことができるよう

になる。しかし、90日経つまではシマの喪は明けないとされ、シマの行事である踊りや歌に参加することはできない。１年忌が済むまでは祝い事への参加を避け、新年の挨拶である年賀状は喪中の知らせに代える。

（８）カイソ

埋葬してから何年か後に、洗骨を伴う改葬を行う。それをシマではハカアラタムル（墓改め）、あるいはカイソ（改葬）と称している。津名久のような砂地では７年から13年ほどでカイソできるが、粘土質の土地ではそれ以上かかる。また、長く病気をした人は比較的早く骨になるが、健康体であった人は時間がかかるとされる。一般的には13回忌頃行われるが、ユリヅキ（閏月）がある年や身内に妊娠・出産や厄年がある場合はできないため、家によっては20年くらいできないこともある。

カイソは子や孫の最後の親孝行とされ、遅くても33回忌までには行わないといけない、とされている。お墓のカミサマは33年過ぎると本当のカミサマになるという。しかし、13回忌まではシンセキとともに墓参りをするが、33回忌はめったに行われないとされる。

カイソでは男性が骨を掘り起こし、女性は掘り起こされた骨がテダ（太陽）に照らされないように日傘や雨傘を差す。長女がカミ（頭）を海水で洗い、タオルなどできれいに拭いてから真綿で包んで縛る。カミは一番大事な部分とされ、触ることができるのは妻ではなく、死者と血のつながりのある娘である。娘がいない場合は血縁を重視し、姪などの女性が選ばれる。

洗われた骨は、沖縄製の底に穴の開いたカメに足の骨から立てて入れられる。入りきらない場合はトタン板の上で焼き、小さくしてから入れ、最後にカミを入れる。カイソをするたびにカメが増えるため、夫婦を一緒にまとめるなど骨の整理を行う。石塔を動かしてカメを埋め、また石塔を元に戻す。カイソが終わると、改めてソウシキの日のようにご馳走を食べる。

3　火葬における葬送儀礼

奄美大島では奄美市名瀬（旧名瀬市）と瀬戸内町の二ヶ所に火葬場が設置されている。大和村の人々が利用しているのは、東隣りの名瀬の火葬場である。それは1918年に名瀬村営火葬場として出発しているので、歴史は意外と古い。そのため、「名瀬市街地など仏寺のある地区では明治末あたりから火葬が普及」したとされる［恵原　1979：226頁］。

しかし、「道路事情の問題などがあって、市内周辺部の集落の人々の利用はむずかしかったものと思われる」［加藤　2001：112頁］とされているように、名瀬の火葬場を利用していたのは実際には市街地の人々のみであった。周辺地域の人々にとってその利用は容易でなかったのである。既に述べたように、津名久の住民がそれを利用するようになったのは、比較的近年、昭和40年代後半頃のことである。

とはいえ、現在、津名久における葬法は火葬が一般的になっている。今でも土葬を望む声があるにはあるが、土葬にすると、既述のように、ソウシキの日だけでもシマの人々の多大な労力と時間が必要とされる。そのため、平成12年を最後に、土葬は行われていないのである。

火葬の普及にともなって、通夜は自宅で行うか、あるいは名瀬の葬祭業者の提供する斎場で行うかを選択できるようになった。喪主になる者が本土に行っている場合は、斎場を借りることが多い。しかし、斎場で行う場合でも、死者を１度家にオトモすることが通例となっている。ここでは、自宅で通夜を行う事例を中心に記述したい。

（1）通夜

最近は病院や施設で亡くなる者が多い。その場合は、死者の体をきれいに消毒してくれる。葬祭業者に連絡をし、迎えに行ってもらう。自宅で亡くなった場合は、遺族かあるいは葬祭業者が体を洗う。

自宅で死亡が確認された場合はすぐに時計を止めることができる。しかし、

最近は病院や施設で死亡が確認されることが多いので、死亡時刻と時計を止めるまでの間に時間差ができてしまう。

自宅にオトモするときは玄関から入れ、仏壇の前に北枕で安置する。着物など必要とされるものは全てセットで販売されているため、それを利用する。体が硬直して着せることができないので、上から被せる形で着せる。その際、着物を裏表逆にする人もいる。手を胸の上で組ませ、枕元にマエジュクを置き、その上に線香やろうそくを立てる。葬祭業者は遺族と予算や告別式の挨拶、香典返しの会葬御礼などについて相談する。

奄美大島で一般的に購読されている２社の新聞に広告を載せる。それには亡くなったことの知らせ、通夜（印刷に間に合う場合）、茶毘の儀、告別式、納骨の儀などの時間と場所とともに、喪主や親族の名前が列ぶ。両親、子供とその配偶者はもちろんのこと、兄弟姉妹とその配偶者、オジ・オバ、甥姪、義兄弟（義姉妹）の配偶者、友人の名前まで列ぶ。人数が多い場合は、親族代表、孫代表として年長者の名前だけを載せることもある。

本土に比べてシンセキの名前が多いとされるが、それを見て通夜や告別式に参列するからである。死者と直接面識はなくても、知り合いの親やシンセキだからという理由で参列するのである。新聞の広告料は２社で５万円ほどになる。

通夜や告別式の日に出される料理は仕出し屋に注文することもあるが、シンセキやシマの女性で作ることが多い。葬斎場を借りる場合でも炊事場があり、そこで調理される。料理の内容は自分たちで決める。ショウジンリョウリというが、やはり豚肉や卵を使う。

通夜にはシンセキの場合は夫婦で出るが、それ以外はたいてい男性だけである。通夜の参列者は遺体の枕元にあるマエジュク、もしくは葬祭業者が用意した焼香台で焼香を行う。焼香が終わると料理が出され、それを食べながら家族やシンセキと死者についての思い出話をし、適当な時間に帰る。若い人はビールや焼酎を飲んで騒ぐ。家によっても異なるが、僧侶や神主を呼ぶ

とお金がかかるため、通夜ではあまり呼ばない。「通夜は来たい人だけが来る」とされる。ろうそくと線香の火を灯し続ける。最近では長い時間火のもつものが使われている。

（2）準備

告別式の日は青年団などによる墓や告別式の会場となる場所の掃除、テント張りなどの準備が行われる。死者の名前の書かれた赤と白の旗４本、タイ、マカヤドマ１枚も用意される。マカヤドマはシマの人が作る。作れる人も限られている。炊事はシンセキやシマの女性が行い、野菜を炊いたものや吸い物が午前10時頃、火葬場まで行く人に出される。

（3）野辺送り

入棺は通夜の前であったり、火葬場に行く前であったりで一定していない。クヮンバクは既製品を使用する。大和浜の葬祭業者が本土から取り寄せている。以前は組み立て式のものであったが、最近は組み立てられた状態で送られてくる。昔はクヮンバクに死者の愛用していた着物を入れていたが、最近の服はナイロン製できれいに焼けないので、火葬場から入れないようにいわれている。

葬祭業者が「入棺しますから、遺族の人は来てください」と声をかける。入棺は遺族によって行われる。ラップに包んだおにぎりと10円玉や100円玉の小額の小銭を白い布製の袋に入れて首から掛ける。わらじなども入れる。おにぎりはお弁当で、小銭はあの世で使う小遣い銭だといわれている。布製の袋はクヮンバクの付属品としてついている。最後に親族によって生花が入れられる。

昔に比べると入棺の際に若い人は手伝わなくなり、泣く人も少なくなった、という話を聞く。以前はクヮンバクの蓋は釘で打ちつけられたが、最近はその必要がなく、蓋が閉まるように作られている。蓋に付いている扉が開き、顔を見ることができるものもある。

普通は午後12時頃出棺が行われる。まず、炊事場で男性がタイに火をつけ、

コソデで運んでオモテグチから放り投げる。その後で、親族の男性５、６人でクヮンバクを担いでオモテグチから出す。オモテグチから出せない場合、玄関以外の窓から出す。家の外に出されたクヮンバクはそのまま霊柩車に乗せられ、名瀬の火葬場まで運ばれる。マエジュクや遺影を近親者が持って霊柩車に同乗する。クヮンバクが門口を出ると、家に残る親族の女性が死者の生前使用していた茶碗を割る。

（４）火葬

火葬場までは車で約１時間かかる。火葬場には死者と最後の別れをする部屋が用意してあり、見送りに来た人が焼香を行う。僧侶や神主を呼ぶ場合は、その部屋で読経などが行われ、親族代表がお礼の挨拶を行う。そこで焼香を済ませて帰り、告別式には参列しない人もいる。

別れの焼香が終わると、死者は炉に移され、喪主がスイッチを押して火を入れることになるが、いつまでも押すことができないこともある。その場合は子どもなどが代わりに行う。炉で焼く時間は、死者の性別や年齢、体型によって異なるが、普通は成人で90分ほどである。

参列者は待合室で酒を飲んだり弁当を食べたりしながら、死者の生前の話をして待つ。焼きあがると、拾骨室に移動し、箸で骨を１人１つずつ骨壷に入れる。骨は小さく、頭の形も残らない。長期間薬を服用していた人は足などの長い骨と粉しか残らない。最後に、ノドボトケの骨を入れ、カミの骨で蓋をするように入れる。火葬場の使用料金（待合室の使用料を含む）は奄美市の住民は13,000で済むが、その他（大和村を含む）の地域の住民は33,150円かかる。

（５）告別式

共同墓地の焼香台の前には小さな祭壇が設置され、両横にシンセキが座るためのテントと受付けを行うためのテントが張られる（写真10参照）。また、普段はゲートボール場として使用される道路向かいの広場（写真11参照）にもテントが張られ、参列者が座るためのイスが用意される。通例、１つ

3,000円から5,000円の花輪が20本から30本ほど並べられる。その花輪の中の１つは、ショウシジュウクンチまで置かれる。

ボンサンは天理教や創価学会ならば係りの人、神道ならば高千穂神社の神主を呼ぶが、ほとんどの場合は名瀬の本願寺の僧侶を呼ぶ。名瀬の僧侶は、遠方のため、お礼に５万円包み、ハイヤー（タクシー）で送り迎えする。大和浜の葬祭業者が天理教の係りの人は25,000円で自分の車を運転して来るから安いと紹介すると、安い人に頼んでくれと言われるそうである。また、お金がかかるとの理由で呼ばない場合は、葬祭業者との打ち合わせのときにその旨を伝える。そう伝えられると、葬祭業者は読経を録音したカセットテープを用意し、参列者が焼香するときに流す。宗教や宗派にこだわりのない家が多い。

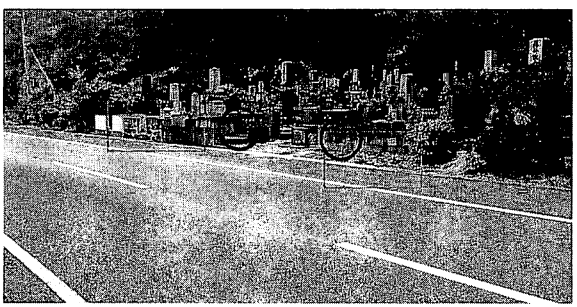


写真10　共同墓地と焼香台（○印の場所にテントが建つ）

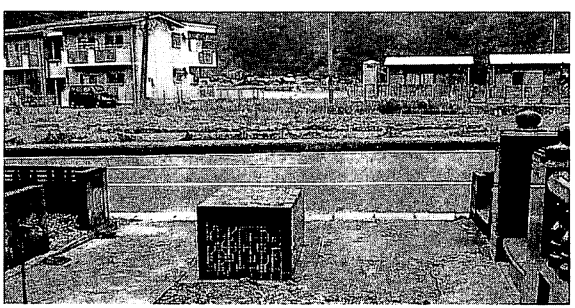


写真11　焼香台側から見た道路向こうの広場

告別式の開始時間は、夏だと午後６時頃で、夏以外は午後５時頃になる。参列者は受付で香典を渡し、記帳を行い、香典返しを受け取る。香典料は1,000円から3,000円ほどで、死者やその家族との関係によって金額は異なる。身内のときに貰った金額を帳面で確認して、同じくらい包むのが一般的なようである。

香典返しは品物と会葬御礼の書面、清めの塩が入っている。会葬御礼の書面は厚めの紙を二つ折りにしたもので、記載された親族の名前が多いときは３枚ほどになることもある。香典を代理で頼まれると、香典返しが領収書の代わりになる。

火葬場から移動してきた遺族や近親者は墓地の少し手前で車を降り、マエジュク、旗、遺影、骨壷の順で列を作って会場に入る。それらを祭壇に飾り、葬祭業者の司会で告別式が進行する。遺族代表の挨拶、弔電の読み上げ、ボンサンの読経、参列者の焼香が行われる。参列者は焼香が終わると、順に入り口で係の者から焼酎を受け取り、それで清めてから帰る。香典返しに入っている塩は、自宅に入る前にお清めとして体に振り掛ける。告別式が終わると、ボンサンを家に招いて吸い物などを出し、お礼の金を渡して、必要ならば寺までオトモする。

（６）納骨・ミキャナンカ・シジュウクンチ

参列者が帰ると、シンセキだけ残って納骨する。ノウコツドウ（納骨堂＝カロート）が付いている墓（写真17参照）は、20、30年ほど前から流行り始め、現在ではほとんどこの形になっている。墓の前にマカヤドマを敷き、そこにひざまずいて納骨する。ぞうりやツカ、杖などが置かれ、旗は四隅に立てられる。死者に近い順で焼香をするが、葬祭業者の指示でシンセキは告別式、ミキャナンカ、シジュウクンチの３組に分けられ、組ごとに焼香が行われる。全員が焼香し終わると、自宅に戻ってシジュウクンチの料理を食べる。手伝いをした青年団や炊事の女性にも出され、酒を飲みながら死者の思い出を語り合う。

写真17　石塔の下にカロートの付いている墓

マエジュク、旗、ツカなどはそのまま墓に置いておき、１週間ほど後で焼き捨てる。参列者には香典返しで会葬御礼の書面を渡しているが、新聞広告でも改めて御礼を行う。２社に載せるため、５万円ほどかかる。他の家がやっていることだから、同じようにやらなければならないという考えが強い。

（７）ショウシジュウクンチ

信仰深い人は四九日にボンサンを呼ぶ。しかし、通例は葬式のときに終わっているので、形だけのショウシジュウクンチを行う。シンセキが集まって墓参りをし、家で吸い物などを食べる。それまでウロウロしていた死者の魂がショウシジュウクンチであの世に行くとされる。ただし、いつあの世に行くのか聞いたことがなく、亡くなった時点で行くのではないかという人もいる。

また、ショウシジュウクンチを過ぎると喪が明け、シマの行事にも参加できる。しかし、一年忌が過ぎるまでは祝い事への参加は控え、年末には喪中の知らせを送る。喪中の知らせは新聞広告で行うこともある。身内に不幸があった年の運動会で走ると怪我をするというが、年に１度の運動会だから参加するともいう。

4　交通網と人口移動

葬法の変化も社会変化の一部である以上、当然のことながら、葬法の変化にともなう儀礼の変化と、より一般的な社会変化によって生じる儀礼の変化とを截然と区別することはなかなか難しい。葬法の変化が生起させたように見える儀礼の変化であっても、より大きな社会変化による可能性も否定は出

来ないからである。よって、ここでは葬法以外の社会変化についても若干の配慮はしておきたい。具体的には、交通網の整備や人口移動などを取り上げ、津名久における火葬の導入・普及との関係を見ることとしたい。

（１）交通網

奄美群島が日本に復帰した翌年の昭和29年（1954年）、奄美群島復興特別措置法が制定された。それは「奄美群島住民の生活水準をおおむね戦前（昭和９年～11年）の本土並みに引き上げるために必要な産業の復興と公共施設の整備をはかることを目標とした」［改訂名瀬市誌編纂委員会　1996：198頁］ものであった。その復興事業により、昭和36年（1961年）には県道の湯湾思勝名瀬線が開通し、名瀬から大和浜までバスの運行が開始された。当然、津名久の人々もその恩恵に浴することになった。

それまでは名瀬と大和村を結ぶ交通手段はポンポン船しかなかった。津名久の隣の思勝と名瀬を結ぶ船の所要時間は、片道１時間半だった。それでも、冬の天気の悪い日は半日もかけて徒歩で行くしかなかった。そのような不便な交通状況はバスの運行により一変した。片道30分で名瀬まで行けるようになったのである。ポンポン船は、その後２年間、昭和38年（1963年）まで運航し、役目を終えた。

その当時、車は役場に１台、民間会社にトラックなどが２、３台、裕福な家庭に乗用車が数台という具合に、大和村全体でも７、８台ほどしかなかった。昭和45年（1970年）頃から各家庭に少しずつ車が普及し始めた。平成16年（2004年）４月現在で、大和村における自動車および原付自転車保有数は1,262台であり、１世帯に付き1.4台まで普及している。

さて、最初に述べたように、津名久において火葬が導入されるのは昭和40年代後半頃からである。そう判断し理解する根拠について少し触れておきたい。実は、津名久で最初に行われた火葬について、個人と年代を特定することは出来なかった。しかし、昭和40年までは火葬はなされず、全て土葬であったことは確認できた。そして、津名久の人々の間では、「早い家では昭和47、

48年頃から火葬を行ったのではないか」とされていることも知りえた。ちなみに、津名久に隣接する大和浜でももっとも早い火葬は昭和49年に行われており、時期的にだいたい一致する。本稿でも人々の記憶する昭和47、48年頃を津名久における火葬開始の時期と見なしているわけである。西暦だと1970年代前半頃である。

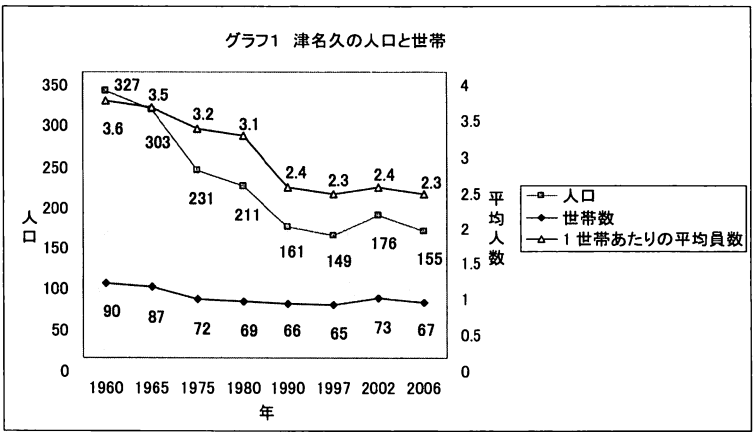
名瀬から大和浜までの県道が開通し、バスの運行の始まったのが昭和36年（1961年）のことで、火葬はそれと同時に導入されたのではなく、早い家でも12、13年後ということになる。それも、直ぐに一般的に導入されたのではなく、土葬と平行しながら次第に受け入れられていったのである。当時は、各家庭に少しずつ車が普及し始めた時期でもあった。

（2）人口移動

奄美諸島における人口は、戦時中1940年頃に一度大きく減少し、戦後じき1950年頃に急激に増加する。その後は、年々、流出・減少の一途をたどる。そして、今日では過疎化が著しい。その推移は、大和村でもほぼ同様である[(3)]。

その大まかな推移を押さえた上で、役場の資料を用いて、火葬が行われる少し前から今日までの津名久における人口、世帯数、平均世帯員数の細かな推移を見たい。昭和40年までは土葬だけが行われていたことが確認されているので、その５年前の昭和35年、西暦1960年以降に限定して見ることにしたい。グラフ１に示されているとおり、津名久における人口は、1960年以降も1990年までは減少し続け、それ以降は横ばい状態になっている。結局、2006年には1960年の半分以下になっている。

人口の推移状況は、世帯数や平均世帯員数でもほぼ同じである。ただ、世帯数の減少は人口に比べて少し緩やかで、1960年から今日までに４分の１ほど減ったことになる。平均世帯員数は3.27から2.3へと減少している。辛くも、１世帯に２人はいることになるが、その中身を把握するには世帯構成や人口構成を見る必要がある。



グラフ１　津名久の人口と世帯

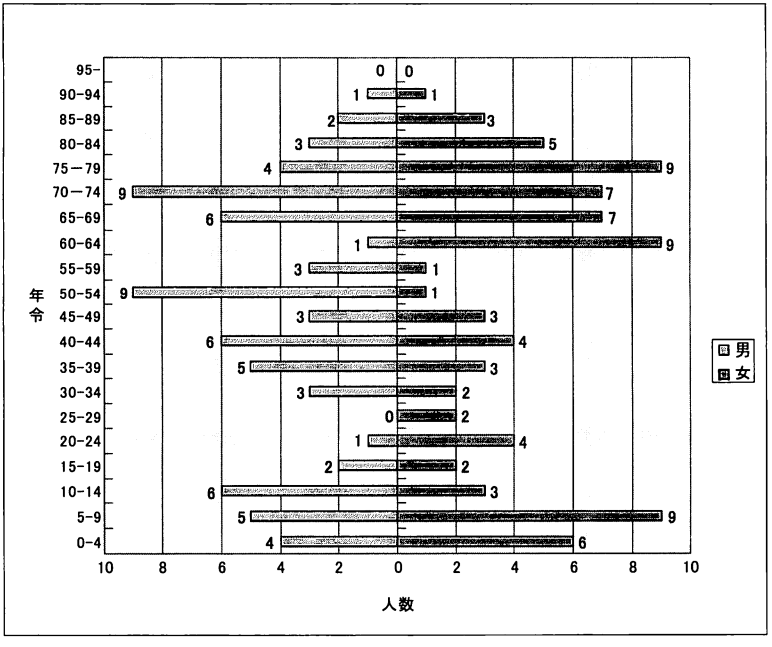
世代数＼員数	1	2	3	4	5	6	7	8	計
Ⅰ	26	16							42（62%）
Ⅱ		5	10	2	4	0	1	1	23（34%）
Ⅲ			1	1	0	1	0	0	3（４%）
計	26	21	11	3	4	1	1	1	68（100%）

表１　津名久の世帯構成（2006年８月現在）

＊　平均世帯員数2.26人

2006年８月現在における津名久の世帯構成を示したのが表１で、男女別年齢別の人口構成を示したのがグラフ２である。津名久の世帯構成は、１世代１人からなる世帯が全体の38%、１世代２人からなる世帯が24%、２世代世帯は34%、３世代世帯は４%となっている。

１人世帯の多くは老人の一人暮らしであり、１世代２人世帯もほとんどは老夫婦のみの暮らしである。それらで全68世帯のうち、42世帯、すなわち62



グラフ２　津名久の人口構成（2006年８月現在）

％を占める。高齢者のほとんどは農業をしながらの年金生活者である。

人口構成に関しては15歳から30歳までの年齢層の少ない点が目立つ。それは高校や大学進学、就職等のために津名久もしくは奄美大島から出て行くためである。また、30歳から60歳の間の女性の少ない点も目立つ。

戦後の津名久における生業は農業と山仕事と機織りが主であった。昭和30年代までは、枕木やパルプの需要があり、住民のほとんどは山仕事で稼いでいた。しかし、その後は需要がなくなり、山仕事は廃れる。それに代わって、昭和40年代から50年代にかけては、大島紬が活況を呈する。が、それも昭和60年代にはいると、韓国産紬との競合などで大幅な減産となり、現在ではそれで生計を立てている者はいない。今日では安定した給料生活者は役場の職員のみと言っていいほどであり、他は建設関係の日雇い労務、商店、兼業農

家、年金生活者などである。

津名久における火葬開始期は、人口に関してはどんどん流失している時期であり、生業に関しては大島紬の戦後における絶頂期であった。人口の流出と紬産業の好景気は時期的に重なっている。高度成長期に需要を大きく伸ばし、1970年代前半にピークを迎える紬産業は、雇い主が名瀬に用意した住居に家族ごと転出した織り工達に大きく支えられていたからである。

紬産業は1980年代後半頃には不景気を迎え、大幅な減産となる。そうなると、名瀬には出ず、シマに居住しながらそれに携わっていた人々まで別の職を求めてさらに都市部へ移住することになる。人口はさらに減り、シマは過疎・高齢化の時期を迎える。津名久で火葬が一般的に普及するのは、ちょうどその頃である。大まかに開始期から10数年ないし20年近くかかったことになる。

5　葬送儀礼の外部化

奄美における葬墓制の変化を近代初頭まで遡って見てみたい。火葬の導入に伴う葬送儀礼の外部化は、沖縄においても、奄美においても同様に起きてはいるが、火葬以前の葬法となると、両者同じではない。奄美においては薩摩・鹿児島の影響下で、１度風葬から土葬に変わり、その後一部の地域を除き、土葬から火葬に変わった。その点、土葬を強制されなかった沖縄とは異なる。葬送儀礼の外部化を取り上げる際にも、薩摩・鹿児島の影響を十分に考慮しながら、奄美は奄美としてまず捉える必要がある。

先田光演は『沖永良部島郷土史資料集』［和泊町　1956］に収録された、明治12年６月の「沖永良部島諸事改正令達摘要録」から葬制に関する鹿児島県庁の諭達類を抜き出して検討し、「明治初期の為政者が島民に対して、埋葬の奨励と神官による葬式を強く求めていたことがわかる」と述べている。それは本稿で問題にしている葬墓制の変化と葬送儀礼の外部化に直接関連す

る指摘である。

それを参考にしながら、「沖永良部島諸事改正令達摘要録」から若干の諭達類を選び出し、本稿の文脈に位置づけたい。まず、葬墓制の変化に関する点から見ていきたい。それに関しては、明治10年（1877年）９月21日に鹿児島県庁から発せられた諭達が有名である［和泊町　1956：71頁］。ただし、当時の文体ではいささか分かりにくいので、重要な用語はそのままにして現代風に訳すると次のとおりである。

死者の葬り方・葬儀の仕方は各土地の人々のやり方に任されているが、まず大きく分けると、地葬と空葬の二とおりのものがある。近年、当島においては神葬祭に改められ、それ以来、当然の事として地葬が行われている。しかし、ある者たちは棺を墓所に送り、喪屋（もや）と称する小屋内に置く。そして、親子兄弟連れ合って、そこに行き、棺を開いて見る。数回繰り返し、数日も経ると、屍は腐敗するが、その臭気を厭わないようであると聞く。それは人情が厚いかのようであるが、実はその臭気を嗅ぐ者は甚だしく健康を害するばかりでなく、近くを通る者でもその臭気に触れると、病を伝染あるいは発生させることになるのである。はなはだ宜しくない事なので、これからはそのような弊習を必ず改め、死者は速やかに埋葬することに改めるよう諭達する。

それに明記されているとおり、明治初期の沖永良部においては死者を埋葬せず、喪屋（もや）と称される小屋に葬った。それは衛生上甚だしく不宜事の弊習なので、速やかに埋葬に改めるよう諭達する、というのである。つまり、衛生上の理由でもって、空葬すなわち風葬から地葬すなわち土葬へ葬法を転換すべしとの諭達なのである。

その諭達によって、実際に風葬から土葬へどのように変化していったかについては、沖永良部島と同一の諭達がなされたと考えられる与論島の事例を

既に示した［津波　2008］。詳細はそれに譲ることとし、次に、葬送儀礼の外部化という点を見たい。鹿児島県庁からの布告と諭達を１例ずつ挙げよう。それらも同じく、重要な用語はそのままにして現代風に訳したい。

明治５年６月第192号布告

最近、自葬を執り行う者もいるかに聞くが、今後そうしてはならないので、葬儀は神官か僧侶に頼むべきこと［和泊町　1956：75頁］。

明治11年11月13日諭達

死亡者があるとき、自葬はしてならないのであるが、これまで本島ではみだりに自葬を行ってきたようである。それは以ての外の不宜なので、以後は神官に依頼すべきこと。神官にも委細を伝えてあるので、死亡者があるときは掛かりの神官へ届け出ること［和泊町　1956：77頁］。

布告も諭達も共通している点は、「自葬」を禁じ、神官や僧侶という宗教者の関与を命じていることである。その「自葬」とは、先田によれば「シマの人々が、神官（以前は僧侶）の儀式を受けないで従来通り自分たちの手で葬式を執り行っていたことを表記したもの」である［先田　1999：47頁］。先田のその見解は、私が諭達類を読んでも十分に納得のいくものである。

自葬をそう理解すると、鹿児島県庁はシマの人々だけで葬儀を執り行っていた沖永良部島民に対して、明治５年には神官か僧侶に葬儀を依頼すべきこと、明治11年には神官に依頼すべきことを命じているのである。つまり、自葬を外部化せよ、としているのである。なぜなら、鹿児島県庁の側では宗教者の関与しない自葬は「牛馬を埋ると同一なり」［和泊町　1956：59頁］と見ていたからである。

自葬の外部化に伴う宗教者は、明治５年には神官と僧侶いずれでも良く、明治11年になると、僧侶は外され、神官のみを認めている。よって、沖永良

部島における自葬の外部化は、廃仏毀釈以前から押し進められ、廃仏毀釈によって僧侶が排除され、神官のみを認めることになったと理解できる。

以上、明治初期の沖永良部島における空葬（風葬）から地葬（土葬）への葬法の転換、およびシマの人々による葬儀としての自葬に宗教者を関与させる葬儀の外部化について見た。自葬を神官などの関与によって外部化することを他葬と呼べば、当時の沖永良部島では、風葬から土葬、自葬から他葬への変化がお上からの圧力で進行していたことになる。つまり、土葬への移行と葬送儀礼の外部化が同時進行していたのである。

それら２つの同時進行は、なにも沖永良部島（および与論島）だけに限定して考える必要はないであろう。近世末期あたりから近代初頭にかけて多少の時間的な差はあったとしても、また階層差や地域差があったとしても、従来の研究においては大筋として奄美全域で薩摩・鹿児島の影響下で、風葬から土葬、自葬から他葬への変化があったと見なされているのである(4)。

6　おわりに

火葬の導入に伴う葬送儀礼の外部化が実際にどのように進行したかを検証するために、津名久における葬送儀礼を土葬と火葬に分けて記述した。土葬の頃にはほとんど全てシマの人々の互助的なネットワークの中で行われていた葬儀が、火葬の導入・普及に伴って葬祭業者によって行われるようになった。確かに、葬祭業者の参入は火葬の普及に伴うものであり、火葬とともにシマの葬儀に入ってきたのである。また、道路網の整備、貨幣経済の浸透、人口流失、過疎・高齢化などと火葬の導入・一般的普及とは深い関係にある。加藤の指摘は津名久の事例に照らしても、きわめて的確である。

本稿ではさらに一歩踏み込んで、奄美諸島において葬送儀礼の外部化は火葬の導入以前にも起きていたことを明らかにした。近世末期から近代初期にかけて奄美では風葬から土葬に変わり、それに神官や僧侶などの宗教者の関

与も加わった。つまり、火葬の導入に伴う葬送儀礼の外部化は、奄美においては土葬に伴う葬送儀礼の外部化の約１世紀後に２度目の外部化として起きているのである。

津名久のような１つの村落における事例であっても、その大きな流れの中で把握し理解されるべきであろう。お上からの押しつけであろうが、業者の関与であろうが、津名久では宗教者はさほど重視されていないし、根付いてもいない。土葬の頃から、告別式に立ち会う宗教者をボンサンと称し、僧侶でも神主でもどっちでも良かった。火葬導入後になると、ボンサンは僧侶や神主から天理教や創価学会の係の人などと幅が広がり、宗教や宗派にこだわらない家が多いとか、なるべく安い方に依頼するとか、金がかかるので呼ばないとか、その重みのなさがはっきりする。

先田は「南島では仏式でもない神道でもない葬儀が、中央からの政治に左右されることなく現在まで続いてきた」と述べている［先田　1999：47-48頁］。それは明治初期において「自葬」が禁じられ、「他葬」を強いられたにもかかわらず、「自葬」の伝統は今日まで継続していることを指摘してのことであった。その指摘は、津名久の事例に照らしても、正鵠を得ている。

２つの葬送儀礼の外部化を津名久の事例で検討すると、宗教者の受入方以外にも興味深い点が幾つか浮かび上がる。火葬の導入が人口流失によってシマの人々の互助的な労力の交換が次第に出来なくなり、それを金で補うかたちで進行するのに対して、土葬の導入は風葬の頃にはなかったであろうイキフリ（池堀）やヘゴ切り、ヤギョ作りやツカ造りなどの労力負担をシマの人々に押しつけるかたちで進行したと考えられる。つまり、シマの人々の労力という点からすれば、火葬は軽減し、土葬は増加させたことになる。そこに２つの葬法の背景をなすシマ社会の状況が読み取れるのである。

土葬の導入に際して関与した宗教者が僧侶であろうが、神官であろうが、イキフリやヘゴ切りは、なければならない役割として出現したであろう。しかし、ヤギョおよびその中に入れるツカに関しては、神官の関与を抜きにし

ては考えられない。形そのものが神社をかたどっており、神道式葬儀における霊屋の一種としか理解出来ないからである。恐らく、廃仏毀釈によって関与を強めた神官達が石仏の首を切り落としたり、位牌を焼却して銅鏡を祀らせたりしたのと同じ時代的なうねりの中で、新たに仕立てたものと見なすのが最も理にかなっているであろう。

葬儀にかかわるシマの人々の役割分担という点からすれば、負担は増えたであろうが、津名久において土葬はしっかり根を下ろし、火葬へ移行する以前は土地の人々にとって伝統的で固有の葬法とさえ思われるほどになっていた。１例とはいえ、平成12年に至るまで土葬がなされていたのである。その一方で、火葬は導入期こそ10年以上も土葬と併存したが、今日ではほぼ100％といっても過言ではないほど普及している。墓も土葬対応から火葬対応にほとんど変わっている。

近世末期から近代初期あたりまでは風葬が一般的であったと考えられる奄美において、その後は土葬が定着し、そこへまた火葬が一般化しつつある。その変化の過程は沖縄とは軌を一にしていない。その点に関し、上江洲は次のように述べている。「沖縄の墓制は、風葬における複葬に基づくものであるという特徴を持っている。奄美諸島でもかつては葬制・墓制とも沖縄と同一の文化圏であったが、薩摩の影響下にあって、土葬になる。しかし洗骨習俗は残してきた。沖縄各地でも戦後いちはやく葬制に大きな変化が生じた。洗骨による複葬（改葬）が改められ、火葬になったことである。いまでは一部の離島を除いて、すべて火葬になったといってよい」［上江洲　2005：22頁］。

その文中で、私が最も注目するのは「薩摩の影響下にあって」とする点である。琉球弧の文化、特にその変容の側面を奄美諸島において把握するに際しては、一般的な地域差もさることながら、薩摩・鹿児島側からの影響も常に考慮されねばならない。もしそれを怠ると、琉球弧において歴史的政治的線引きがまるで存在しないかのごとく、その文化を語ることになるからである。あったものはあったものとして、あるものはあるものとして、語るべき

なのである。葬送儀礼の外部化も、当然ながらその例外ではないのである。

註

(1)　たとえば、尾崎1996、福岡2000、加藤2001、　酒井2003など。

(2)　図１、図２ともに大和村ホームページ　http://www.vill.yamato.lg.jp/より作成。

(3)　奄美諸島全体での1955年の人口は206,363人で、1995年の人口は135,754人である［鹿児島県大島支庁総務課　2006］。大和村では、1955年に5,528人だった人口が1995年には2,092人に減少している［大和村　2004］。

(4)　たとえば、昇曙夢［1949：491-492頁］

引用文献

上江洲　均　2005　『沖縄の民具と生活―沖縄民俗誌Ⅰ―』　榕樹書林
恵原　義盛　1974　「奄美の通過儀礼」『琉大史学』５　琉球大学史学会
恵原善盛・名嘉真宜勝編著　1979　『沖縄・奄美の葬送・墓制』　明玄書房
尾崎彩子　1996　「洗骨から火葬への移行にみられる死生観」『日本民俗学』207
改訂名瀬市誌編纂委員会　1996　『名瀬市史』
鹿児島県大島支庁総務課　2006　『平成17年奄美群島の概況』
加藤　正春　2001　「奄美・沖縄における火葬の導入と普及過程」『生活文化研究所年報』第14輯
酒井　正子　2003　「奄美・徳之島の火葬率調査より」『沖縄文化研究』Vol. 29　法政大学
先田　光演　1999　『奄美の歴史とシマの民俗』　まろうど社
津波高志　2008　「与論島における洗骨改葬－奄美的文化変容の現場－」『奄美諸島における聖地および葬地の人類学的共同研究』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（A））
昇　曙夢　1949　『大奄美史―奄美諸島民俗誌』
福岡　直子　2000　「奄美大島＜芦検＞の新しい共同墓地―建設に至る経過と墓制の変化」『民俗文化研究』No. 1
大和村　2004　『大和村村勢要覧』
和泊町　1956　『沖永良部島郷土史資料集』